

馬場孤蝶

近世風俗雜談



近世風俗雜談

明治から大正へかけての話

風俗といえは主として、服装、髪^の形、履物等のことを、いうべきなのであろうが、何分家に引き込みがちであつたし、また外出しても古本を探すというようなことにのみ気を取られていたので、いわゆる風俗の変遷などには殆ど気がつかずにしまった。

それで今大体のところを思い出してみようとするのだ

が、どうも甚だ臆気で、十分なことを書けないのはまことに残念である。

吾々にでも第一番に気をつくのは、現代——大正になつてから——では、洋装が殆ど一般的といい得らるる位に波及したことである。それから、その次ぎには洋風の建築が非常に多くなつて来たことである。第三には、巻煙草の使用の範囲の広がったことである。それから、第四には西洋料理——カフエー、バー、食堂の流行が全く常態として定まつてしまったことである。

明治十四五年頃から以降のことであれば余り善く覚

えていないのだが、その時分から二十四五年頃までは、何んといつても洋装は余程少かった。官吏とか、教師とか、大きい会社に勤めているというような一部の人々に限られていて、それも役所や、会社へ出る時とか旅行の場合などに重に着用したもので、かきよ家居の場合は勿論のこ
と知人訪問とか、散歩とかいう場合には、何時いつも和服であつたといつていいくらいであつた。民間の儀式の場合——婚礼とか、葬式——などにも、大体の人々は羽織、袴であつた。この時代では——殊にこの時代の初期では——洋食の宴会というのは少かつたので、そういう和食

の宴会へ出席するには、大体日本服であつたらうと思う。この時代では、大きい宴会は大抵柳橋あたりで行われたようであつた。吾々は柳光亭りゆうこうていの名などをしばしば耳にしたことがある。両国の中村楼が流行の高等旗亭きていであつたことは、少し前のことであつたらう。この時代では、新橋に大旗亭たいきていはなかつたように思う。尤も、築地の寿美屋すみやとか、花屋とかいうのが、此の時代の末期にはもうできていたかも知れぬのだが、それにしても、その二軒は家の広さでは大旗亭とはいえなかつたらうかと思われる。

この時代の背広は両前りょうまえが可なり上の方から切り落し

て、丸みをつけたものであった。ボタンは四つ位ついていたかと思う。下袴ズボンのひどく細いのが流行はやったのもこの時代であったと思う。靴も編あみ上げはまだそう一般的ではなかった。この時代の初期では、鳴なり皮と称して靴の底へ一枚皮を別に入れて、歩くたびにギユウギユウ鳴るのを善しとしていた。

フロックも、この時代のは胸を広くあけてあった。襟の折返しへ裏を出して見せていたのもあった。毛織のテエプのようなもので、すっかり縁ふちを取ったものもあった。モオニングは後のちのものよりはずっと短かった。

外套は長短いろいろに変わった。即ち初期においては短く、後期においてはやや長くなつたが、ともにボタンは、大外套の場合のほかは、中位の大きさのもので、その数は大抵五つ位はあつたろうと思う。

和服に至っては、吾々貧乏書生にはどうというほどの記憶はない。唯此の時代の初期には素人の男でも、少し洒落しやれた人は、黒縮緬の紋つきを着ていた。大島紬は余り知られていなかったように思う。夏の衣服では、薩摩飛白がずりは一般に知られていたが、久留米は余り知られてはいな

かつたであらう。

にじゆう

二重廻しは二十五六年前から行われだしたものであらうと思う。それまでは、吾々は冬でも上へは何も着なかつた。雨の時もそうであつた。女の方は襟のかかつた雨合羽あまがつぱを着ている者もあつたが、男で雨合羽を用いたものは吾々の知人などのうちには一人もなかつた。旧式のトンビを用いた人は少しはあつたらうと思う。

その代り、この時代の初期には肩かけが流行りはやだした。大きい風呂敷のようなものの四方に幾つも房の附いているやつを中から二つに折って、即ち三角形のかたちにし

て吾々も肩から背せなへと背負ったものであった。

元より書生間の流行であったが、舶来の絹の色のついた半巾はんけちで頸をまくことがはやった。少し黒みのかかった赤い色のものなどが一番広く用いられたようである。

シャツは洋服の分は無論糊で固かためたホワイト・シャツが正式であったが、吾々などはフランネルのシャツへ胸とカフス・カラアとを白い固いので取りつけて間に合す場合もあった。この時代の後期には、夏のシャツで、縮ちぢみの縞しまで前うちひもを打紐あみあで編上げのしたものが流行った。吾々もそれを洋服用として用いたものであったが、夏目漱石君

はそのフランネルのシャツを洋服の下へ着てウー・ド師を帝国ホテルに訪問して、錠前直しと間違えられたという話である。

帽子は、紳士用としては、山高帽であったが、今日のものの二倍ぐらいの高さの縁へりの反そったのが行われた。頂てっ辺ぺんが一文字になっているもつと低いのもあったようである。書生用としては、釜形帽かまがたぼうや、ハンティングの前身のフランネル製の前で襷をとったものなどもあった。夏帽は矢張り麦藁が一般であったが、今日こんにちのものより山が低く縁へりが広がったように思う。リボンに赤いのがあつ

て、今日では如何にも無粋なものであつたのだが、吾々は得意でそれを冠つたものだ。

下駄は南部表なんぶおもて、もしくはそれのまがいの前のめりの駒

下駄が一番広く行われていた。籐表とうおもて——即ち蝉表せみおもて——

はまだそう行われていなかったように思う。麻裏草履あさうらぞうりが

広く用いられていた。職人の突っかけ草履もよく見掛け

た。車夫その他の労働者は大抵草履わらじを用いた。従つてど

この荒物屋にも草履が吊してあつた。今日では、どうか

すると草履を買うには可なり探さなければなるまいかと

思う。その時分の草履は藁ばかりで作つたもので、後のちの

もののように布きれは何処にも使ってなかつた。

雪駄せったは古くからあつたものであるに拘らず、面白いことに、一時いちじすたれた形になつていたように思う。穿く人を多く見かけるようになったのはこの時代より少し後のちになつてのことであつたと思う。

ここで髪なの刈り方をいうべきであろうが、老人は大抵撫なでつけ即ちまあオール・バックのような形にしていた。われわれは毯栗いがぐり即ち五分刈であり、紳士連は主に左から、七三分け位にしていた。この時代は皆もみ上げを

残していたし、誰も床屋で鼻の穴をすらせるのであった。真中から髪を分けるようになったのは明治三十年近くであり、もみ上げもそのころからだんだん多くそり落すようになってきたと思う。

持ち物などについても僕は幾らも書き得ない。巻煙草が今日ほどは、はやらなかつたのだから、煙草飲みは大抵刻みきざを用いた。煙草入れは筒つきの腰下げのものであったようだ。共皮ともがわ若くば共布ともぎれの筒つきの煙草入れはもう少し後で用いられるようになったと思う。明治十七年ころのことかと思うのだが、西洋刻みをライスペエペアで自

分で巻いて飲むことがはやった。始めは小さいすだれ簾を用いて巻いていたが、直じきに小さい機械が輸入されてそれを用いるようになった。この時代では、後期に近くなつて、カメオとか、ピンヘットとか、パイレエトとかいうような外国巻煙草が輸入されだしたのみで、日本製の巻煙草は岩谷いわやの天狗煙草があつたばかりのように思う。西洋巻煙草を真似た京都の村井のサンライスやヒイロウの売り出されたのは少し後ではなかつたらうか。

食い物については、僕などは殆ど何もいい得ないのだが、唯西洋料理屋の数の実に少かつたことだけはいい得

られる。そしてそこでは、コオスを食わざるを得なかつたのであろう。今日のように品を選んで注文し得るようになつたのは少し後のことだと思ふ。その代り天麩羅屋で小料理もするといふような家は沢山あつた。講武所宇治の里などは入り込みの飯屋であつたが、そこでは、昔上野の坊さんの支度所であつた名残りであつたのである。うが、酒を茶の土瓶へ入れて客に出すのであつた。牛肉屋が随分多かつた。それが書生に対しては今日のカフェ——の役を勤め、その女中——即ち、ねえさんが今日のウエートレスの格であつたわけだ。

この時代の初期には、楊弓場ようきゆううばがほうぼうにあつた。十
 一二年ごろには芝の公園へ赤羽から入つて行くところ
 ある土手のあたりにも一一軒あつたことさえ覚えてい
 る。神明しんめいは元より、浅草郡代、湯島天神とそういうところ
 には楊弓場が群居していたのだが、淡路町の宝亭の横
 町になるあたりにも数軒あつた。これは坪内逍遙たいじん大人の
 『書生氣質』に描かれている。これ等楊弓場たるものは、
 矢取女やとりおんなと称して客を取る女がいて、客の相手をして、楊
 弓をともに引きなどして客をもてなすのであつた。弓を
 持つのは左の手をもつてするのが正式であるのだが楊弓

場の女はなるべく弓を右の手に持って射るように教えられるのだと聞いた。それは客と向い合いになるようにするためであつたのであろう。

明治十六七年ごろであつたらうか、下谷したやの佐竹の原が開けたが、そこへできた大弓場だいきゆうばの女で右の手で弓をとるものを見たことがある。思うに、前記の楊弓場の女と同じ理窟であつたのであろう。

これ等の楊弓場のちが後の酩酒屋めいしゆやの前身だといつて宜しいであらう。市中の酩酒屋なるものできたのは明治二十五六十年頃だと思ふ。横浜のちやぶ屋なるものの制度の東

京へ侵入して来たものと見るべきであろう。

まだ明治十五六年頃までは、根津に遊廓があつたと記憶する。あいそめばし藍染橋までのところはひきて両側に引手茶屋ぢややがあつて、そこから北が女郎屋じよろうやであつた。元より今のように道が真っ直ぐに団子坂下へと抜けているのではなかつた。藍染橋からももの三町と行かぬうちに突き当りになつていたと思う。それから先きは田だの畑位になつていたのであろう。その時代には根津から団子坂へ行くには、権現の裏門から行く小さい現今の路によるほかはなかつたのだ。

明治二十年ごろにはもう菊人形が盛んになっていたろうと思う。

この時代の末期までは、まだ吉原が可なり富裕な紳士連の遊所ゆうしよとしての勢力を維持し得ていたろうと思う。娼妓があべつこうの鼈甲かんざしの簪かんざしを幾つもさした姿で店を張っている店も幾軒があったのではなかろうかと思う。明治三十年ごろになつては、娼妓にそういう昔ながらの姿をさしていたのは龍ヶ崎という店一軒きりのようであつた。

芸者町は、この時代では、赤坂さえまだ幾らも発達していなかつたであらう。溜池その他山王下の池が埋られ

たのは何時ごろのことか今記憶していないが、あの辺の
発達はその後のちのことである。神楽坂も富士見町も少くとも
此の時代の後期になって擡頭だいてうしだしたものと見てよろ
しかろう。

この時代の前期には待合まちあいというものはまだできていな
かったかと思われる。まだ船宿の時代であった。料理屋
で客を泊めたのもあったらしい。そういう隠れ座敷の残
っているのが、明治三十年ごろまではあったように聞い
ている。

この時代の初期の交通機関は唯人力車とガタ馬車があったのみであった。いうまでもなく、人力車は護謨輪ゴムワなんぞは思いも寄らぬ。金輪かなわでバネも悪かったのだが、それでも吾々はそう乗り心地が悪いとは思わなかった。遊廓たかだい通いの車は高台と称して、梶棒を上げると、客の身体がうしろへ落ちて、膝頭が上へあがるというような風に、腰を掛けるところの勾配を作ったものであった。これは車夫が早く駈け得るためであったのであろう。滝夜叉たきやしやだの、自来也じらいやだのを悪どい色彩で背に蒔絵した二人乗は直じきになくなったように思うのだが、普通の一人乗と同じ無

地の塗りの二人乗は明治三十年ごろまではまだ余程残つていた。

ガタ馬車はいわゆる円太郎馬車であつた。極めて粗造な木造の車体へ真黒に汚れた母衣ほろをかけたもので、馬は二頭であつたかと思う。馬丁べつとうが短い角形の喇叭ラッパを吹いて行人こうじんを警戒するのであつた。本郷通りなどでは夏はそういう馬車の馬が斃たおれた。或る時は、馬が外それて、四町目あたりの薪屋の前に積んであつた薪の山へぶつかつて、馬が崩れ落ちた薪の下へ埋られたようになったことなどもあつた。

円太郎という名称の起りについては二三説があるようであるが、橘家円太郎という落語家が高座で馬丁べつとうの持つていたのとおんなじの喇叭ラッパを吹いて、馬丁べつとうの真似をしたので、その名称が起ったのだらうと僕は思う。

前記の本郷通りをとおった馬車は、筋かい即ち今の白梅のあたりから板橋へ通うものであった。その他には浅草から千住の方へ通うもの、両国あたりから市川の方へと向けて通うもの新橋から品川方面へ向けて通うものという風に、三系統があったのであらうと思う。

鉄道馬車のできたのはこの時代の前期であったよう

あるが、新橋から大通りを上野へ出で、浅草を経て、浅草橋に至り、それから本町三丁目をとおって、大通りの線に入るというだけの部分しきや通じていなかった。二十三年ごろでさえ、新橋品川間はまだガタ馬車が通っているのみであったと記憶する。車体は前の円太郎よりは余程よくなっていたけれども、動揺は随分烈しかった。トラックの円太郎自動車に決して劣らないくらい揺れたと思う。

九段下から両国へと通う赤塗りで馭者台の可なり高くなっている馬車の始まったのは、この時代の後期であった。

たかと思う。これはオムニバスといていたように記憶する。これは鉄道馬車が柳原を通うようになって、直きに廃止された。

大官、貴族は箱馬車を自用として持っていた。また、ドッグ・カートをもっていた紳士も少くはなかったかと思う。

自転車もこの時代に輸入されたかと思うのだが、無論三輪車であった。この時代の末期に近い時分であったろうと思うのだが、直径五尺もあろうかと思われそうな大きい輪と直径一尺には足らなかつたと見えたような小さ

い輪の附いた自転車が行われた。これは実用的のものではなくして、青年などが慰みに乗るものであつたようだ。下谷辺にそれを借す家があつたらしく僕の友だちなどで、それに乗廻したのがあつた。

隅田川を一銭蒸気が通いだしたのは何時いつごろであつたかよく記憶せぬが、明治二十二三年ごろにはもう確に通つていたように記憶する。

次ぎには、順序が少し変になつたが大人の遊戯、事のことを書いて置こう。銃じゆうりよう獵は無論流行した。勝負せんごく仙石

貢^{みつぎ}氏等の大学生時代——明治十四年ごろか——には度々友人等と獮に出たというような話を聞いている。玉突も可なり行われたようであつた。花札が広く売られるようになったのは、明治十七八年頃かと思う。この勝負事^{ゲーム}は、上方^{かみがた}から移入されたものといつてよろしかろう。小さい射的の店が諸所へできたのは明治二十年頃かと思う。

競馬は横浜の根岸が元で、不忍池の周囲が埋められて馬場が出来たのは明治十六七年頃かと思う。

明治十八年頃までは市内の諸所に借馬屋^{しゃくばや}があつた。そ

ういう借馬屋には何処にも小さいながら馬場が附いていて、その馬場を幾往返で幾ら、外へ借りて出れば、一時間幾らという風に、料金が極められていた。僕の覚えてゐるのでは、団子坂下に一軒、本郷田町に一軒、天神町（数寄屋町寄り）に一軒とそう三軒借馬屋があつた。僕の家が本郷五丁目——本妙寺坂下——に地面を借りていた時分、地主が借馬屋をやろうといいだして、僕の父が調馬ちようばの仕事を引き受けてやったことがあるが、それは余り客がなかつた。その時分には、可なりな馬でも五十円位、安いのは十五円ぐらいなのもあつた。

子供の遊びは、土や鉛のめんこ、ばい——これをべえ、
といていた——たこ 凧、かなどう 金胴の独楽こまのぶっつけ合いなどが
重なものであった。竹馬も無論行われた、べえはほら法螺貝がい
を少し長目ながめにした様な小さい貝であったが、その貝の半
分以上を石で叩き欠き、下の部分の横にも少し穴をあけ
其所からろう蠟なり鉛なりを注ぎ込んで重量を付けて置く、
それから一方では、たらい 盥の上へいじり蓆なり畳表の古いの切
れなりを敷いて、その中を窪みにして置き、べえの下の
ところへ紐を巻いて、双方から、その蓆いじりの窪みのなかへ
独楽のように廻し、それがぶつかり合ってはね出された

方を負けとするとという遊びであった。これは僕などの子供の時分のものであったのだからそう長く続いたのではなからうと思う。とにかく、僕の子供の時分には、玩具屋おもちゃやでべえの貝を売っていた。

明治二十年ごろまでは、初午はつうまの稲荷祭も方々で行われ、地口行燈じぐちあんどんの幾つも並べ懸けられた路地の奥から、子供の叩くらしい太鼓の音が聞こえて来るのであった。

神社の大祭も、明治十五六年頃までは、大抵夏の盛りに行われたようであったが、連年れんねんコレラが流行はったがために、何時の間にか秋祭になってしまった。まだその時

分には、昔の江戸の祭の面影を止とどめていた。牛に引かせた山車だし、踊屋台おどりやたい、神輿みこし、それにつき添う若い衆等の揃いの浴衣ゆかた、可なりに華やかで賑やかで威勢のいいものであった。神田祭に、娘を吉原へ売ってその金で支度をしたという時代には無論及ばなかったけれども、それでも、一体に祭には随分とはり込んだものであった。一昨年か去年の六月かに四谷見附で山王の神輿を見たが、皆牛に引かして囃子か何かついていた。道路の交通上やむを得ずそうなのであるうが、全く隔世の思いがした。

その時代でも、子供が樽天王を担いで廻ったのは近ご

ろと同じであつたが、子供が黄色い麻をたすきにしてそれ
 で小さいいぬはりこ犬張子、だるま達磨というような玩具をおもちや縛りつけ、万燈まんどう
 を振って飛び歩いたのは、今ではもう古い事のなかへ数
 え込んでもよかろうと思う。玩具屋で万燈を売っていな
 くなつてからもう可なり久しくなるであらう。一葉女史
 の『たけくらべ』——二十八年作——には子供の祭の時
 の出でたちが、

「くちなし染めの麻だすき成るほど太きを好みて、十
 四五なるより以下なるは、達磨、木兔みづぶく、犬はり子、さ
 まさまの手遊びを数多きほど見得にして、七つ九つ十

一着くるもあり、大鈴小鈴背中にがらつかせて、駈け出す足袋はだしの勇ましく可笑しく……」

という風に描いてあるのだが、その時分でも、山手では、そういう風俗はそろそろなくなりかけていたような気がする。

町内の子供が団結して、他の町内の子供の団結と喧嘩して石合戦をしたというようなのは、精々せいぜいで明治二十年くらいまでのことで、その後は教育ごの普及と警察の完備と共に、いつの間にか止んでしまった。

青年の方でも、熊本の学生と薩摩の学生、薩摩の学生

と土佐の学生という風に、学生が幾分団体的の喧嘩をす
るといふような風習は、これも精々で十四五年ごろまで
のことであつたと思う。ここで、一寸考えさせられるこ
とは、その時代は封建殺伐の時代を去ること余り遠くな
かつたに拘らず、学生間には刃物を以て人を傷つけたと
いうようなことを殆ど聞かなかつたことである。少青年
が小刀ナイフなどを振り廻すようになったのは、どうしても明
治二十七八年の戦役以後のことである。

明治十四五年頃からこつちの事で注目に値すること

は、それ等の時代から思潮の上での反動期に入りかけていたためでもあるろうが、古い行事などの次第に復活しだした状態である。明治の初年には旧弊頑固として棄られた事物がまたそろそろ用いられ始めたのだ。これは、民衆が一端古い趣味は排しりぞけてしまったもののそれに代るべき新しい趣味は生れて来なかつたので、もとの古い趣味にだんだんと戻って行くより外ほかはなかつたというところも余程あつたらうと思う。

要するに、維新の革新は進んだ少数者の進まざる大衆に対する勝利征服に過ぎなかつたので、世の中が落著く

に従って、大衆の方は次第に後戻りをしたという形に見えた。

古い骨董の愛玩、古い行事の復活というようなことが眼だちだした。豆蒔ともんきが都門ともん近くの神社や仏閣で行われだしたのは、少しあとであつたにしても五月のぼり幟、雛祭などが、そろそろ広く行われそうになりだしたのもこの時代である。撃剣げきけん、弓術、柔術というような武術の復興が可なり目ざましかつたのもこの時代である。なかにも、老若を問わず誰にでもできる弓術の流行は可なり盛んであつた。市内で、いわゆる大弓場の一軒もない区という

のは殆どないといつていいくらいであった。手のかかり費用のかかる流鏑馬^{やぶさめ}。騎射の如きさえ、明治二十年ごろには一度大規模で執行されたことがあった。

撃剣も可なりに行われて、九州の上田馬之助（義忠）、松崎浪四郎などの老大家の名が度々吾々の耳に入った。

市中で、骨接ぎ、柔術教授の看板をよく見かけるようになった。流派は天神真揚流^{てんしんしんようりゅう}というようのが多かったように思う。講道館の創立も大凡^{おおよそ}そのころであったであらう。

その外、謡、茶の湯、活花というような芸事、易、禁厭^{まじない}、

巫子みこうかが伺いというような迷信なども、二十七八年ごろに近くに従ってだんだん弘布ぐふするようになった。

さて、書き落した建築——家——のことを少し書くことにする。明治二十五年ごろまでは、まだ勿論、洋風の家というのは実に少かった。商店などでは、銀座以外には洋風の建築は先ずなかったといつてよかつたである。そのみならず、明治十五六年ごろまでは神田の錦町、神保町からかけて、麴町の番町などには、まだ昔の旗本邸の建物のそのままに残っているのが幾つかあつたくらいであつた。中央大学の起源ともいふべき三菱商業

学校——明治義塾——の当時の校舎は大きな旗本邸らしいものをそのまま使っていた。

その時分には、住宅難どころではなく、家主難ぐらいなものであったのである。借家住宅ならば、山手などにはどこにでもあったといつてよかつた。それでいて、まだその上に、家賃五円位な家なら立派な庭が附いているのであつた。いや、全くのところ、今僕の住っている小石川あたりなどでは、庭の無い家を探すとしたら、却つてその方が骨が折れたらうと思われるくらいであつた。この辺のその時分の家は、大抵門構えであつて、街路から

直ぐ格子戸になっている今のような家は殆ど一軒もなかったと思う。それほどまでに、市内にも地面に余地があったのだ。

街路の照明は、銀座の大通りだけは瓦斯ガスの街燈があつたが、その外の大通りが何うなつていたかよくは覚えていない。此の時代の瓦斯にはマントルがなかつたと思う。家のなかは、銀座の大通りだけが瓦斯を使っていた位で、同じ銀座でも裏通りは大抵石油ランプや行燈あんどんを使っていたようであつた。軒燈はもうあつたかも知れぬが、まだ一般的ではなかつた。この時代の末期までは、まだ芸者

屋とか、町内の鳶頭とびがしらなどの住居には、格子戸のなかに、
御神燈ごしんとうと称する可なり大きい円い提燈ちようちんが下っていた。
山手などは路が随分暗かったろうと思うのだが、今はそ
の感じが殆ど心に残っていない。一昨年の震災直後のこ
とを思い出してみても、始めて昔の暗さが心にはつきりと
分る位なものである。幸いにして人間は、苦しかったこ
と、悲しかったことを早く忘れるものである。

日本文学電子図書館

近世風俗雑談

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治の東京」

中央公論社

昭和17年5月15日 印刷

昭和17年5月20日 発行



日本文学電子図書館